

皆様、新年明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、平成17年の新春を爽やかに、お健やかに迎えになられたことと存じ、心からお慶び申し上げます。

また、山田知事、梶本市長、国会議員の先生方を始め、ご来賓の皆様には、年初ご多忙の中をご臨席賜り、厚くお礼申し上げます。

去年は暑い夏と、多くの台風、洪水、また地震まで加わって、自然からの厳しさを突きつけられました。今年はもう少し穏やかな年になることを念じております。幸いにも、今年の干支の「乙酉^{きのとり}」は、柔らかさ、成熟を意味し、夜明けを告げる動物でもあります。芽吹いてきた新しい動きが育っていく、そんな年になることを心から願っております。

人の還暦は60歳であります。我が国も今年は敗戦後60年を迎えます。当時を偲ぼうと、昭和20年1月1日の朝日新聞に目を通しましたが、悲痛な文字が並んでおりました。「比島戦局まさに危急」、「軍需工場は正月に非ず13月」。「総力戦は国民の一人一人が、最後の汗、血の一滴まで絞って戦わねばならない」等々。しかしながら、3月にはマニラ陥落、硫黄島玉砕、東京大空襲、6月沖縄玉砕、8月原爆投下、ソ連参戦、ポツダム宣言受諾に至る経緯はご高承の通りであります。

しかし、私が驚き、感銘しましたのは、あれだけ打ちひしがれたにも拘らず、8月20日の新聞には「何事にも同胞愛、戦後の困苦に耐えよう」、「科学立国を目指そう」とありまして、作家の吉川英治氏は8月23日のコラム(1週間後)に、「我々は戦に破れたのだ、憤激している者、嘆き悲しむ者、親に死別し、その妻、その子供たちが嗚咽しているとき、その耳元に説教してもどうにもならない。思い切り泣かせよう。戦い敗れたのだから男らしくこの難に耐え忍び、再び起き上がるために敗者の苦を甘んじて受けよう。」と書いております。私たちの先人は、危機に瀕してなんと立派に振る舞い、戦後の日本を立て直したことと感心します。

さて、我が国は今、明治維新、敗戦に次ぐ3度目の困難に直面しております。国、地方の借金は720兆円(一世帯1,530万円)に達し、それを解消しなければ子孫に過大な増税か、インフレによる増税以上の耐乏生活を強いなければなりません。

家庭の崩壊、子供の犯罪は目を覆うばかりであります。中でも少子化の問題は国の危機であります。あの敗戦下の食うや食わずのなかで日本人はベビーブームを起こしました。それは、今苦しくても将来きっと良くなるだろう、という希望があったからであります。今これだけ豊かになりましたのに若い人が結婚しない、子供を作らない。(若い女性の我侭もありますが)、それは将

来に不安があるからであります。吉川英治氏は敗戦直後に「日本人は表面は平凡だが、その地下には豊かな水脈がある。それを活かしきれなかったから、敗戦の悲慘を味わっている。戦後はそれを噴出させよう。」と言っています。

明治維新以来、近代国家を夢見て営々と積み上げてきたものを、昭和の戦争ですっかり失い、戦後、経済復興を合言葉に懸命に働いてきた我々は、豊かになった後、方向を見失ってさまよっています。小泉内閣は、成功体験で傲慢になった、日本の硬直した諸々のシステムを変えようとしてきましたが、各論、実行面では既得権者の反対にあって道半ばであります。

今年から三位一体の地方自治が動き出します。東京一極集中の弊害をなくするためにも、地方の自立は大事であります。税と権限が地方に移されるなら、国以上に京都市、京都府がしっかりしなければなりません。まず第一に、我われ経済人が仕事をしっかりして、どこにも負けない、さすが京都だといわれるような経済基盤を作り上げようではありませんか。我われは自己の利益を言わないで、自ら進んで街を良くすることに努めようではありませんか。京都に蓄積された良き遺伝子と呼び覚まして、山田知事、梶本市長のリーダーシップの下、府市職員、議員、市民が一丸となって「日本の夜明けは京都から」を目指したいと思います。

私ども商工会議所では「美感都市・京都」の旗印の下、京都の街そのものを「京都ブランド」として、街の美しさ、そこに住む人の心優しさ、その人たちの造る商品、サービスの質の良さを高めたいと願っております。また、「産学公連携」の下、大学にある知識を広く取り入れ、技術開発、製品開発やベンチャービジネスの糧になればと願っております。また、京都産業を根底から支える「中小企業の振興」にも、力を入れたいと存じます。

我が街に誇りを持つためにも、自分の街の歴史、足元を良く知る必要があります。「京都検定」は多くの人からの関心をいただき、京都の観光の振興にも意義があったと存じます。2008年日本開催5回目のサミットが開かれますが、是非とも京都で開催してもらいたいと存じます。塚本会頭以来、京都の悲願でありまして、国際会議場の隣接地にはホテルまで誘致し、今年3月には京都迎賓館も完成いたします。京都の美しい自然や歴史、諸々の文化を先進国首脳に味わってもらうよう、またメディアを通じて、世界中の人たちに京都を知ってもらうためにも、広く関西の行政や経済界とともに、サミット誘致を進めてまいりたいと存じます。

ようやく回復してきた経済を停滞させないよう、本年が日本の新たな復活の年となりますことを念じますとともに、ご参会の皆様に取りまして、幸多く良き年となりますことをお祈りいたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。